04 設計コンセプト

＜ダイアグラム＞

廃村 ➡ 人の生活の消滅 ➡ 人に代わる放牧 ➡ 人の住まない里山

対象敷地を「保存・持続する場」「放牧の場」「人の場」の３つのゾーニングに分ける。人の関わる要素を減らし、人の暮らしに代わり牛を放牧することで、人が関わらずに里山とその機能を維持できる仕組みの提案。

＜コンセプト＞

1 お金につながる取り組み → 人の活動

2 人と自然がつながる場 里山環境維持への取り組み → 放牧

3 自然環境・生態系・対象敷地特有の植生の保全と持続 → 維持管理

＜ゾーニング＞

対象敷地

赤枠で示した対象敷地。十日町新座という地域であり、行政区画によって区切られている。縦約４ km、横約２ km、面積約 10k ㎡の地域である。対象敷地中央には県道 599 号線が通っていて、設計に反映する。また、対象敷地内の河川は「飛渡川」から分岐した「濁川」も放牧で活用する。

放牧敷地

放牧をするにおいて放牧に適した地形で敷地を区切る。現存する植生、樹木林の群集は含まない区分け。また牛の飲み水を確保するため川のある場所を放牧敷地内に含めた区分けをする。

植生保全敷地

対象敷地の約７割の面積を占める。固有の植生が現存していて、保全、存続するエリア。里山として重要な要素を含むエリアでもあり、植生を保全することで生き物も連鎖反応のように活性化する提案。

初期ゾーニング案　最終ゾーニング案

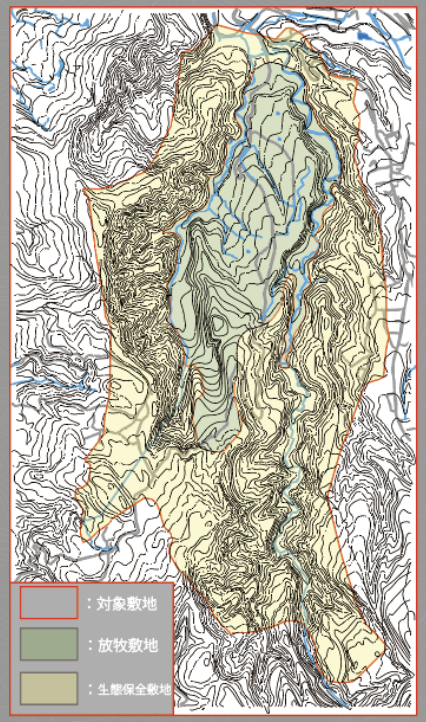

図 -10：設計ゾーニング図

＜二つの設計軸＞

1 ランドスケープデザイン

デザインの取り組み
・里地、里山、奥山エリアのデザイン
・川、水辺のデザイン
・生き物、生態系のデザイン

生物の生息空間の４つ
・いろいろな環境がある
・様々な植物がある
・でこぼこである
・つながっている、近くにいる

対象敷地に点在する生物の生息域をコリドーを設計することで繋げ、生物多様性の里山環境を実現する。生物多様性によって生態系が循環し、100 年先も生物多様性が持続するシステムとなる。

2 コミュニティデザイン

デザインの取り組み
・里山環境を維持する取り組み
・取り組みのコスト、労力の最小化
・取り組みの継続

取り組みの企業化
・利益が生まれるシステムの提案
・提案環境に適した取り組み
・取り組みの継続

放牧を用いて里山の要素、機能を持続させる。その放牧をコスト、労力を最小限の抑えて持続させる仕組みづくり。

かつての里山の暮らし

放牧を事業化することで取り組みの持続を図る

確実な利益で取り組みの 100 年先の未来も維持継続